

日交研シリーズ A-591  
平成 24 年度共同研究プロジェクト  
事故・違反歴に着目した運転者の交通事故分析  
刊行：2014 年 3 月

事故・違反歴に着目した運転者の交通事故分析  
Road Traffic Accident Analysis considering Driver's Accident and Violation Records

西田 泰（公益財団法人交通事故総合分析センター）  
Yasushi Nishida

要 旨

事故を起こした・違反を犯した運転者に対しては、処分者講習等の教育が実施されているが、それにも関わらず事故や違反を繰り返す運転者が存在することから、事故や違反を繰り返す者の心理・行動特性を考慮した指導、教育が必要と考えられる。そこで、運転者管理ファイルと交通事故統計データを統合した交通事故統合データベースを使い、運転者教育等の人を対象とした交通事故対策に資するために、過去の事故や検挙違反の経験とその後の事故傾性の関係を、性別、年齢層や居住地等の運転者属性あるいは昼夜、天候、事故類型等の交通事故属性に着目して分析した。

分析は、①先行研究が示した「過去の事故や検挙違反の回数が多い者ほどその後も事故の当事者となる率が高くなる」という関係（以下、「関係 A」という）が、運転者属性によらず一般化できるか否かの検証と、②経験した事故の内容や条件とその後の事故傾性の関係を明らかにするという 2 つの観点から実施した。

その結果、1) 関係 A は運転者の性別、年齢、居住地及び車両用途に関わらず成立するものであり、その理由は、事故や検挙違反の回数が多い者ほど、運転頻度が高いためであることを、また、2) 経験した事故とその後の事故傾性の関係をみると、経験した事故の内容や条件と同じ事故を起こし易いもの（追突/駐停車中や車両単独）、起こし難いもの（出会い頭）、あるいは、経験した事故の内容や条件との関係が見られないもの（高齢運転者や職業運転者による事故）の 3 つがあることを、明らかにした。

交通事故対策の効果向上のためには、対策の計画者、実施者が運転者の事故傾性を正しく理解することが必要であり、前述のような事故経験とその後の事故傾性の関係に対応して、道路交通環境に応じた運転支援、望ましい運転方法を修得・実践させるための運転者教育、さらに加齢に伴う能力低下を補うシステム（高齢運転者向け）や高い運転頻度を補償して暴露度当たり事故率を低下させるシステム（職業運転者向け）といった考え方からの対策検討が効果的と考えられる。

キーワード：交通事故分析、事故当事者率、相対事故率、準道路交通暴露率、  
無過失事故運転者

Keywords : Road Traffic Accident, Accident Driver Rate, Relative Accident Rate,  
Quasi-Induced Exposure Rate, Not-at-Fault Accident Driver